魔法を解かれた山

——トーマス・マンとフリードリヒ・ゲーオルク・ユンガー——

友　田　和　秀

『魔の山』完成後の1920年代後半は，よくいわれるようにマンにとっては「栄光の時代」であり，それは，1929年のノーベル文学賞受賞によって頂点に達する。「栄光」につつまれて光り輝くトーマス・マンの姿。しかしその光があまりにも強いため，ほんとうのマンの姿がわれわれの目に屈折して映っているということはないだろうか。本稿は，あるインタヴューをきっかけにマンのまえに姿をあらわしたひとりの若者とマンとを並べてみることによって，「栄光」の光のなかに透けて見えるマンの姿を探り出そうとする試み，いうならば「等身大」のトーマス・マン像にできるだけ近づこうとする試みである。同時にそれは，ヴァイマル時代という時代そのものに目を向けることをも意味している。

I

「ミュンヒェンのトーマス・マンの書斎は明るく，くつろいだ雰囲気だ。日ざしが親しげに書物をなでてゆく（……）。」[1]1928年1月，駐ミュンヒェンフランス領事の息子ルウィ・ドュリヨはインタヴューのためにマン家を訪れたときの模様をこうしるす。「ほとんど出しぬけに」[2]，出迎えたマンはこのフランス人に独仏関係について語り出す。1926年1月に自分がパリを訪れたときとくらべていまや両国の「心情」はずいぶん和らいだものになった。「ひと月ひと月両国の関係は確実なものになってゆきます。大陸のふたつの強国は，たがいにより良く知り，たがいにより近づくという要求に応えているように思えま

す……（……）。しかし今日重要なこと，それはヨーロッパ大陸が生きつづけてゆくことであり，ほかのなにものでもないのです。どの国が主導権をとらねばならないかというようなことは，もはや問題ではありません。」[3]

汎ヨーロッパ的な立場に立ってフランスとの共生を説くマン。しかし第一次大戦においてじっさいの戦闘ばかりでなく，思想的にも激烈な一戦をまじえた両国なのであった。マンがいうほど，ことはそう簡単にはこぶのだろうか。ドュリヨもそう思ったにちがいない。かれはたずねる。

けれどもあなたは，ドイツの若者がヨーロッパの協調に肯定的であり，かれらに，とりわけフランスと友好的な関係を維持してゆく気があるとお思いなのですか[4]。

心配無用，というのがマンの返答である。なぜなら自分は，「わたしたちの若い世代がシュトレーゼマン氏の心から平和を求める政治を継続してゆこうとしているのを確信している」から[5]。つづけてかれはその舌鋒をドイツのナショナリズムに向ける。

ところで，わたしたちのところのナショナリズムの陣営は，わたしの目に全然危険なものには映りません。（……）ドイツでは，ナショナリズムはあなたの国のような知的な問題ではまったくないのです。だからわたしはそれにいかなる意味もみとめません。ドイツのナショナリズムは，知的な若者たちを結集することなどできはしないのです。なぜならそれは，いかなる原理も，いかなる教義も提供することができないのですから[6]。

親仏的態度を強くにじませつつドイツのナショナリズムを切って捨てるような発言である。唐突にマンの口をついて出たものではないだろう。

1925年3月，マンはフランスのある雑誌からのアンケートに答えるかたちで『ドイツとデモクラシー――西側との協調の必要性――』と題された評論を

あらわす。この評論は，当時1921年の講演に大幅に加筆修正されてできあがったばかりの『ゲーテとトルストイ』にある「授業」という章の最後，つまり「最後の断章」の直前におかれている部分と大筋において同じものである。そのなかでかれはイタリアのファシズム，またスペインのプリモ・デ・リヴェーラ将軍による「軍事ファシスト」独裁政権に言及しつつ，「いたるところでナショナリズムがその水位を大きく増して」いるという認識を示したうえで（XIII. 572；引用内傍点，原文イタリック），ドイツにあって「ドイツのファシズム」に加担することは，「ポアンカレ氏を正当化」するだけであり，さらには「フランスにあってドイツとの平和，協調，和解および紳士協定に意をもちいている人たちの立場をきわめて愚劣なしかたで危うくすることなのだ」とつづける（XIII. 577）。これはむろんまず第一にマンの「ファシズム」批判とみなしえるものである。しかしその背後に，「ファシズム」という形態のなかにもっとも尖鋭的なかたちをとってあらわれるナショナリズム，議会主義，リベラリズム，デモクラシーと鋭く対立するナショナリズムそのものにたいする，ヴァイマル・デモクラシーの支持者となったマンの本質的な批判を読みとることができる。

このようにナショナリズムとの対決姿勢を鮮明に打ち出したあとで，マンは『ゲーテとトルストイ』にはない一文をさし挿む。「まんなかの国」であるドイツに宿命づけられている「東と西のあいだでの＜フリーハンドの政治＞」に触れて，「戦中，戦後の何年かのあいだ，ドストエフスキーの東にたいするわれわれの帰依は猛烈なものであった」とかれはいう（XIII. 578 f）。そしてこうつづける。

> ドイツはふたたびそのまなざしを西へ向けはじめる。（XIII. 579）

＜まんなか＞に身を置きつつ「ドストエフスキーの東」からふたたび「西」に顔を向けるドイツ。「ナショナリズムがその水位を大きく増している」時代のなかにあって，「ドストエフスキーの東」――これはむろんボルシェヴィズム

のロシアを意味する――よりも西側，とくにフランス，それもポアンカレとは一線を画す親ドイツ的な勢力と協調してゆくことこそが，ヴァイマル・デモクラシー体制を安定させる方途のようにマンには思えたのである。このような発言の背後には，外的要因として1924年5月のフランス総選挙におけるポアンカレの敗北，「左翼連合」の勝利，エリオ内閣の誕生といった事実をあげることができる。だが同時に，「ドストエフスキーの東」から「西」へというマンのこのことばは，第一次大戦から1925年当時までのいわゆる＜転向＞をはさむマン自身が歩んできた道を，さらにはナショナリズムと対決しつつ西側と協調するというかれがこれから歩んでゆこうとする道を示すものとして，大きな意味を持つということができるだろう。

相対的安定期のなかでナショナリズムが増大しているという事実。その一例をわれわれはジャーナリズムに見ることができる。1926年11月30日，ハインリヒ，トーマスのマン兄弟を中心とする六人の男たちが「文化的中心としてのミュンヒェンのためのたたかい」と題された講演会をミュンヒェンで催した。そこでおこなわれた講演はのちに一冊の冊子として刊行されることになるが，その序文のなかでトーマス・マンは，この催しは，「新聞に面倒をみてもらっている下品なファシズムに飽き飽きした，リベラルな，（……）精神と教養に親しみを持つミュンヒェン」がしっかりと存在していることを内外に示すためのものだという[7]。あるいはじっさいの講演でもかれは，ミュンヒェンにはびこる「反ユダヤ主義的なナショナリズム」の存在（X. 223），また，「よき理性にコントロールされなければ」，ラーテナウ暗殺にいたってしまうような「心情」（X. 225）について述べたあと，講演のしめくくりで，「このミュンヒェンは不満なのだ」と訴える（X. 226）。そしてその「不満」は，「たとえばミュンヒェンの表現であるべきところを，語るにせよ黙するにせよおおよそその反対のことをするある新聞にたいする不満」（ebd.）なのだといって，ことさら新聞をとりあげるのである。反動的ジャーナリズムの活動がナショナリズムの水位を高めていたのであった[8]。これはなにも，レーテ共和国崩壊後右翼の牙城と化した観のあるミュンヒェンだけに限られたことではないだろう。

冒頭のインタヴューにもどろう。1925年にマンは反ナショナリズムの立場から「ドイツは西に顔を向ける」といい切った。しかしいま，このインタヴューでかれがインタヴュアーに語ってみせるドイツは，1925年のものよりもはるかに西にシフトしているという印象を受けはしないだろうか。それには理由がある。まず考えられるのが，独仏間の精神的交流の活発化である。マン自身1926年1月に戦後はじめてパリを訪問し，一定の成果をあげる。さらに兄ハインリヒは翌年の2月26日，ヴィクトル・ユーゴ生誕百二十五周年を記念して五千人の聴衆をまえにパリで公演をおこない，大成功をおさめることになる。フランスの側からもヴァレリー，ジッドといった知識人がこの時期あいついでドイツを訪れている。あるいはもうひとつだけ例をあげておくなら，1928年，ハイデルベルク大学に仏独交歓を促進する財団が設立されたりもしている[9]。このような動きを支えていたのが，政治的な面での独仏関係の進展であった。1924年8月にドーズ案が成立，翌25年，シュトレーゼマン，ブリアン両外相によって独仏宥和を決定づけるロカルノ条約の締結，そして1926年9月，ドイツはついに国際連盟に加入，国際社会の一員としてみとめられるにいたるのである。大きく西にシフトしたマンの発言の背後には，このようにシュトレーゼマンの履行政策およびロカルノ精神による独仏関係の緊密化，それに呼応するかたちでの精神的交流の活発化があったのである。1925年のはじめにはやくも独仏協調の必要性を訴えていたマンにとっては，インタヴューがおこなわれたこの時期ドイツがかりそめにせよ繁栄していたということをも考えあわせるなら，一方ではナショナリズムの増大という事実があるにせよ，それでも事態は，外面的にはまことに好ましい方向に向かっていたということができる。

それにしても，である。1925年にマンが措定するドイツは，あくまで西に顔を向けているだけで，あらゆる留保を可能とする＜まんなか＞という立場が明確に確保されていた。いまこのインタヴューでかれは――意図的にかどうかはわからないけれど――その＜まんなか＞についてはひとことも触れない。そうしたうえで，つまり＜まんなか＞という立場を欠落させたまま，かれは戦勝

者」意識がマンのうちに生じていたのであり，その意識が右翼からの攻撃によっていっそう鮮明なものとなったのである。

そのあとかれは，インタヴューでの発言はさすがに舌足らずと思ったのかふたたびナショナリズム批判をおこなう。ドイツのナショナリズムは，「精神的能力がない。それは字を書くことができず，なんらかのより高い意味で人を惹きつけることもできない。それは野蛮以外のなにものでもない。(……) それは，ドイツ精神にたいする許されることのない罪である」と (XI. 770)。ここでかれはヴァーグナーと対比しつつ「模範」としてのゲーテを，「民族的でゲルマン的な世界にあってもっともふかいところでゲーテをキリスト教に結びつけていた」「連帯的で教化的な使命の意識」を，ゲーテの「諦念」をとりあげる (ebd.)。論法じたいは1925年の『ゲーテの『親和力』について』，また同年1月21日付のヨーゼフ・ポンテン宛書簡に見られるものと同じである[14]。ポンテン宛の手紙でマンは，「民族的でゲルマン的な世界は野蛮なものから三歩しか離れていない」とつけ加えている[15]。ナショナリズムの土壌である民族的でゲルマン的な世界は，フランスとはことなりそれを「教化」するものがないかぎり，「野蛮」へと転落してゆく。だからこそ，「野蛮以外のなにものでもない」ナショナリズムに抗してゆくためには，「異教的豊満」(ebd.) を追求したヴァーグナーとは反対に，おのれの「教化的使命」を強く意識しつつ「諦念」を，「野蛮の利得にたいする断念」(IX. 182) を掲げたゲーテを模範として仰がねばならないのである。マンのナショナリズム批判は，ゲーテによって支えられていたのであった。マンにとってゲーテは，創作活動だけにとどまらず政治的な面でも大きなよりどころとなる存在だったのである。

1928年のインタヴューをめぐる事件からは，誹謗されることによって逆により鮮明なものとなったマンの強い自負心とともに，かれの発言に敏感に反応するナショナリズムの存在，しかもたとえマン自身がその存在を軽視していたとしても，けっして無視することができないぐらいにそれが広範な広がりを見せていたという事実を見てとることができる。しかしこれでおわりなら，当時しばしば生じていた[16]マンと反動的ジャーナリズムとのいざこざというだけで

話はすんでしまうだろう。だがこの事件に新たな相貌を与える一文があらわれた。フリードリヒ・ゲーオルク・ユンガーの手になる『魔法を解かれた山』である。

Ⅲ

フリードリヒ・ゲーオルク・ユンガー。1898年9月1日うまれ。第一次大戦に志願兵として参戦。1928年当時のかれは，すでに数々の著作をあらわし，いわゆる「革命的ナショナリズム」の中心的存在となっていた三つ年上の兄エルンスト・ユンガー，第一次大戦の塹壕戦のなかに新たな人間，新たな「英雄」を見出し[17]，「根元的なもの，母なる大地との新たな関係――これがナショナリズムの本質である。この母なる大地の表層は物量戦の烈火によって焼き清められ，血の奔流によって受胎した。ナショナリズムの本質とは，民族の神秘な始源の言葉に隷属し，それを二十世紀の言葉に翻訳することである」と主張する[18]エルンスト・ユンガーの強い影響下にあった[19]。そのかれが，マンのインタヴューおよび『ベルリーナー　ナハトアウスガーベへの抗議』をふまえて1928年3月7日付の『デァ　タ－ク』に掲載したのが，『魔法を解かれた山』なのであった。

「ドイツのフランスかぶれどものおめでたいはしゃぎぶりは，我慢の限度をはるかに超えるかたちをとりはじめた」[20]――ユンガーはまず「ドイツのフランスかぶれ」，心はパリに飛んでいったというのに相変わらずドイツの「不毛の荒野」にしがみつき，ヴァレリー，ジッド，ジュール・ロマンがやって来ただけで，またハインリヒ・マンがパリで「売れ残りの倫理」を披露してみせただけで，「前進だ」――このことばは『ベルリーナー　ナハトアウスガーベへの抗議』のマンの発言を受けている（XI. 768）――という「フランスかぶれ」にたいする攻撃からはじめる。ユンガーによるなら，ドイツとフランスとを隔てる「ふかくて実り豊かな対立」こそが何世紀にもわたって両国を発展させ，偉大な業績へと導いてきたのである。ところがマンを中心とする「フランスか

ぶれ」たちはこの対立を解消し，両国を協調させようとする。そんなものは「幻想」，「死に絶えた時代の決まり文句」だとユンガーはいう。かれはつづける。「宥和を主張する者たちを見てみると，かれらのうちだれひとりとして戦争の崇高な風景をくぐり抜けておらず，だれひとりとして（……）フランドルのガスがたちこめた平野を目の当たりにして，それをおのれの世界像にとり入れはしなかったことに気づく。いったいどういう時代に生きているというのだ，現在を決定しようという要求を掲げるきのうの世界のこのビーダーマイアーどもは！」[21]ここからは，戦争が事態を決定的に変えてしまったという認識，さらには戦争体験を持たず，「きのうの世界のビーダーマイアー」，とはつまりいまだに戦前の世界に身を置いている旧世代の知識人たちが，「フランスかぶれ」をひけらかして現在の問題に口を挟むことにたいする，若い世代の大きな憤りをみとめることができるだろう。

ユンガーたち戦争体験を持つ若い世代にとって戦争とは，「どのような思想や感情にも新たな意味を与えてくれる」もの，「あらゆる脆いもの，疑わしいものを許さず」，「軟弱な道徳主義を一掃」してしまう「ふかい諸力が奏でるファンファーレ」だったのであり，それが開けてくれる未来もまた「泡立つ大海」のようなもので，けっして安寧のうえになりたつものではない。このような若者たちにとって，いまは，「永遠の偽善者」たちが「生の巨大な裂け目を糊塗するために（……）仲介者気取りで時代のバリケードに飛び上がるのを我慢しているときだろうか」。「大地が全身をふるわせて新たな爆発の準備をしているというのに，快適さを世界観にしているときだろうか。」[22]

以上が議論の前提である。「人間存在に見られるいくつかの腐敗過程を精確に描写する者トーマス・マンは，空気が通らず隔離された魔の山からわざわざ身を乗り出して来て，おのれのペンでドイツのナショナリズムをつつかなかったなら，われわれにはまったくどうでもいい存在だったろう。」[23]つづいてマン批判の口火がこう切られる。『非政治的人間の考察』の著者マンは，「今日のわれわれにどのような政治的雰囲気を説き勧めているのだろうか」。それは，「ボルシェヴィズムあるいはファシズムのエネルギッシュな生命感情」でもなけれ

ば，「デモクラシーの足場が脆くも崩れ去った時代における独裁，大胆不敵な絶対主義のあらがね」でもない。いや，マンが勧めるもの，それは「ブルジョワジーの社会」なのである。そしてマンこそがこのブルジョワジー，「労働者および兵士の層」にはまったく属さず，「どのような危険なデーモンの目ももはやその光る目でなかをのぞき込むことのない」，「美容サロンのような」，「まさしく魔の山の結核サナトリウムにくらべうる」生気がなくて繊細なブルジョワジーの，ドイツにおける「代表者」なのである[24]。ユンガーにとっては，マンがあれほどこだわっていた「市民（ビュルガー）」という概念などなんの意味も持たないかのようだ。それはともかく，ここでは「ボルシェヴィズム」，「ファシズム」，「独裁」といった動的なものに向けられたユンガーのまなざし，その対極に立つ旧世代「ブルジョワジー」の「代表者」としてのマン，そのブルジョワ世界を象徴的に描き出した小説『魔の山』というユンガーの見解を確認しておこう。

つぎにユンガーはそもそものことの発端であるナショナリズムを話題にのせる。マンは「戦前の市民的愛国主義」と戦争によってはじめて可能となったナショナリズムとを混同しているとかれはいう。戦争によってうみ出されたナショナリズムとは，「労働者階級を国家と結びつけ，祖国をその心奥において蘇生させる決定的な試み」なのである。だがマンにはそれが「大言壮語」にしか映らない。マンは「小説家，雑文書きとしてナショナリズムを評価しているのである」。しかし「魔の山を描写することがナショナリズムの課題なのではない」。「インク」は，ナショナリズムの「要素」なのではない。むしろそれは，「赤く輝く血を愛する」。ナショナリズムは，「いかなる＜平和＞への欲求も持ちはしない」。それは，衰弱した「市民的人間」が求める「安らぎと秩序」などまったく問題にはしないのである。それが望むのは，「時代のただなかにダイナマイトをほうり込んで（……）情熱を掻き起こすこと」，「さまざまな葛藤を根こそぎ露わにして」「ドイツの蜂起」を，「革命」を促すことなのである。かれはつづける。「ドイツの可能性」，それを，「文明に畏怖を感じることなく，危険なものを熱望する一滴の血を血管のなかに注入し，恍惚として望まね

ばならない」。これこそが「ナショナリズムの心情」なのだ。この心情は「精神的能力」など持ちはしない。しかし「精神」,「生殖不能な脳の精液」たる「精神」がいったいどうだというのだ。「トーマス・マン氏は,(……) ドイツのナショナリズムをドイツ精神にたいする許されることのない罪という」。「大戦で倒れた者たちよ!」ユンガーは戦没者たちに呼びかける。「墓から出て魔の山へ巡礼し,(……) かれらがそれを分離し,明確なかたちにするために血の最後の一滴を流した,あの諸要素を<宥和>させようとする (……) 魔法の音に耳を傾けるがいい」と。最後にユンガーは,「若くて大胆な男たち」が,魔の山を粉々に粉砕してしまう日がまもなくやってくるだろうという望みを表明してこの一文を締めくくる[25]。

ユンガーの論評からまず第一に読みとれるのは,ユンガーたち若い世代とマンの世代とのあいだに横たわるふかい断絶であり,戦争がその断絶を決定的なものにしたということである[26]。戦争は,若い世代に強烈なインパクトを与えた。マン自身もドイツの新生をもたらしてくれるものとしての戦争—敗戦—革命という感情を1920年前後までは若者たちと共有していた[27]。だがかれはヴァイマル・デモクラシーという<現実>を肯定し,ドイツの安定を志向することでナショナルな青年層から離反してしまう。ユンガーの目にそのようなマンの姿は,フランスに媚びることで古いブルジョワ的世界にひたすらしがみつこうとしているものとしか映らない。そのマンが,ブルジョワ的世界をそのまま象徴する魔の山から這い出してきて,「フランス流のデモクラシー主義を吹聴」[28]するばかりか,返す刀で「ドイツのナショナリズムは精神的能力がない」といってナショナリズム批判を展開するのである。ユンガーが反発するのも無理がなかろう。なおこの反発の背後には,現下の情勢にたいするいらだち,つまり相対的安定期,シュトレーゼマンを中心とする「旧世代ブルジョワジー」が政治の世界で主導権を握りつつ独仏協調を推進し,その結果として体制が「安定」しているという事実があることも忘れてはならない。

マンにたいする反発からユンガー自身のナショナリズムが明らかになる。それは戦争,より厳密にいうなら戦争体験によってうみ出されたナショナリズム

であり，旧秩序たるデモクラシーを超克するものとして，ボルシェヴィズム，ファシズム，独裁といったより動的でエネルギッシュなものを志向する。「精神的能力がない」というマンの批判にたいしてユンガーのナショナリズムは「生殖不能な脳の精液」たる「精神」をきっぱり拒否する。むしろそれは「赤く輝く血を愛する」。ほとばしるような＜生＞の感情に支えられたナショナリズムということができるだろう。その対極に位置し，それがたたかいを挑もうとしているのが，体制にしがみつきながら「精神」を，「宥和」を説く旧世代ブルジョワジーなのである。最後にユンガーは戦没者たちに，魔の山へ巡礼し，「魔法の音」に耳を傾けるがいいと呼びかけていた。ここに魔の山から現実に向けて発せられる「魔法」の意味が明らかになる。それは，独仏協調を推進することで戦没者の心を裏切り，＜生＞のナショナリズムを骨抜きにしようとする＜精神＞の力なのである。だから魔の山粉砕というユンガーの望み，かれにとって「魔法を解くこと」とは，＜精神＞の力を背後に主導権を握る旧世代を打倒してそのうえに戦争世代による新たなナショナリズム，それにもとづく新たなドイツを築きあげることを意味していたのである。

ユンガーは『魔の山』を徹頭徹尾戦前のブルジョワ的世界を舞台にした作品と考える。ユンガーが『魔の山』を「正しく」読んだかどうかという問題とはまったくべつに，かれはこの小説が持つ一面をうまく捉えているということができるが，このような見かたをしていたのはユンガーひとりではなかった。すでに『魔の山』刊行直後，マンは『魔の山』があまりに主知主義的な，＜精神＞にかたよりすぎた作品であるとするヨーゼフ・ポンテンとのあいだで文筆家／詩人論争に巻き込まれることになるが，その過程で，マンを古い世界，過去の世界の代表と捉え，『魔の山』を戦前の作品，老人向けの，「マンの青ざめた精神性」がにじみ出た作品と主張する若者たちがあらわれてくる[29]。ユンガー自身の『魔の山』観も基本的にその延長線上にある。またポンテンとの論争では，1924年10月，レーン山で催された第一次大戦での戦没者を悼む大規模な青年団体の集会に参加した若者たちのあいだに，＜精神＞に偏重しているように映るマンにたいするかなりの反発が見られたことが報告されている[30]。

『魔法を解かれた山』は，特殊ユンガー的なものというよりも，マンにたいする感情という点では多くの若者，とくにナショナルな青年層の気持ちを代弁したものであるということができるだろう。しかしそれだけだろうか。つぎにマンの発言をとおしてユンガーに光を当ててみよう。

『魔法を解かれた山』を送りつけられたマンがヴィリィ・ハースに宛てそのことを報告した手紙一通をのぞいて[31]，われわれは当時のマンとユンガーとの直接的な接点を見出すことはできない。しかしユンガーが描いてみせる世界は，マンにとって必ずしも無縁のものといい切ってしまうこともできないのである。

マンは1920年代後半の時代をどう捉えていたのだろうか。1927年，かれはある評論のなかで，時代の前面にますます明瞭なかたちをとってあらわれた「相対立する」「ふたつの陣営」について述べる。それは，「精神的な人間の陣営と，非精神的，反精神的な人間の陣営である。というのも非精神性というものは，今日のような時代にあっては中立や精神にたいする無関心を意味するのではなく，精神にたいする獣のようで荒々しい，狂ったような憎しみを意味するからだ」(X. 889)。あるいは同年のべつの評論では，「合理主義，主知主義，リベラルな市民性か――それとも，今日獣のように熱狂しながら＜新たなもの＞，＜生＞としておのれをたたえる，歯ぎしりをしながらの理念の否定か」という「誤った，人を混乱させる二者択一」に言及している（X. 680)。当時＜精神＞に敵対する陣営，クラーゲスの「生の哲学」に代表されるような反精神的非合理主義の潮流が非常な高まりを見せていたのである。このような潮流はナショナリズムともけっして無縁ではありえない。1929年，マンはレッシングについての小論のなかでつぎのようにいう。

> 合理主義者にして啓蒙主義者。かれは今日のわたしたちになにを差し出し，なにをいうだろうか（……)。理性をたんに疑うだけではなく，喜んで，このうえなく満足して理性を疑い，非合理的なものを悪意を込めて神格化し，精神を，生の首吊り役人として誹謗するわれわれに。(……) 革命の像を一

夜にして奪い去り，それをわたしたちの，反動的な陣営にひきずり込んで，いまやそれで「保守革命」を提供しているわたしたちに。(X. 250)

ユンガーは，マンが戦前の市民的愛国主義と戦争によってはじめて可能となったナショナリズムとを混同しているといって非難していたが，マンはけっして両者を混同していたのではない。むしろマンがもっとも警戒し，警告を発していたものは，戦前のナショナリズムとは明確に区別される，文字どおり戦争によってうみ出された新たなナショナリズム，1926年の『パリ始末記』における「革命的蒙昧主義」にたいする激しい非難（XI. 48）がすでに示しているように，「革命」の概念を剽窃したナショナリズムだったのであり，そのようなナショナリズムが時代の主潮となりつつある非合理主義と合流することなのであった。うえの引用を見れば，例のインタヴューから一年後にはマンの危惧が現実のものとなろうとしていたのがわかる。つまり相対的安定期もおわりを告げようとする1929年には，反精神的非合理主義がナショナリズムと合流し，「革命」の衣を身にまとった「保守革命」として，政治の世界の前面に立ちあらわれつつあったのである。

「保守革命」は全体として，旧秩序たるデモクラシーを超克する動的なにかを志向した[32]。それは同時に＜近代＞を超克することをも意味する。ここに，政治的な「保守革命」が，おなじく＜近代＞がもたらす個の疎外を克服しようとする非合理主義と合流する可能性が開ける[33]。一方ユンガー自身のナショナリズムも，強烈な反精神的ヴェクトルに規定された＜生＞のナショナリズムではなかったか。「生とは，脳の無前提の遊技ではけっしてない。(……) 生はなによりも血の法則にしたがう。すなわち生は血の共同体の構成要素なのである。(……) ナショナリズムは，血の法則にしたがう共同体の新たな意識から誕生する。それは，血を支配者にしようとする。」[34]1926年に刊行された『ナショナリズムの開進』のなかでかれはこう主張する。「この血の共同体の意識は，血を弱め，精神の共同体を強めようとするあらゆる動きにたいするたたかいを要請する。(……) ナショナリズムは，どのようなものであれなにか陶酔

させるもの，野性的な血の誇り，英雄的で力強い生命感情を持っている。」[35]
＜精神の共同体＞にたたかいを挑む＜血の共同体＞。それによって支えられた＜生＞のナショナリズム。さきに引用したマンのことばを思い返してみるなら，われわれはもはやユンガーの思想を，ユンガー個人にのみ還元されるものとみなすことはできないだろう。

ユンガー自身『魔の山』との関連でさきに見たように，ナショナルな青年たちと志向，あるいはヴェクトルを共有していた。しかしかれは，それだけにとどまる存在ではなかったのである。『魔法を解かれた山』の背後に開けてくる世界に目をやるならば，われわれはそこに，時代の一断面を尖鋭的に体現するユンガーの姿をみとめることができるだろう。非合理主義とナショナリズムの結節点として，時代の深層を規定する潮流のひとつを，マンがその危険をくりかえし指摘してきた潮流を体現する姿を。

Ⅳ

非合理主義とナショナリズムとの結節点として時代のなかに明確に位置づけられるユンガー。ではマン自身は時代との関連で自分をどう捉えていたのだろうか。「代表者」としての意識にもう一度目を向けてみよう。

1925年1月21日，マンはヨーゼフ・ポンテンに宛た手紙のなかでつぎのようなことをいう。

> 美しく力強いことばです。このことばは，わたしが公の場でよく掲げる真実，ナショナルな問題においてはひとりの人間の意見や言説はほとんど重要ではなく，それにたいしてすべてが存在に，行為にかかっているのだという真実をいい当てています。『ゲッツ』，『ファウスト』，『箴言詩』それに(……)『ヘルマンとドロテーア』を書いた者なら，たとえ偉大なフマニストであっても，またたとえ文明に大いに親しみを込めてコスモポリタン的ないかがわしいことをやってのけたとしても，偉大なドイツ性の発露であり，ま

たそうありつづけるのです。私信なので一緒に並べることをお許しいただきたいのですが，青年期に『ブッデンブローク家の人々』と『トーニオ・クレーガー』を，熟年になって『魔の山』，この絶対にドイツでしか成立しえない，これ以上ドイツ的なものはそもそも考えられない書物をあらわした者なら，十分に純真で，ナショナルな「自然」をたっぷり持っており，一定の，思慮ぶかく良き意図のもとで，「精神」にほんのすこしことばをかけることも許されるのです（……）[36]。

ゲーテについてのことばは，マン自身いっているようにさまざまなところで言及されている[37]。問題なのは後半。マンはたとえ私信のなかであるにせよ，いや，私信のなかであるからこそ，つい本音を漏らしてしまう。本稿第二章で見たようにマンのナショナリズム批判の根底にはゲーテの存在があった。だがここでかれは自分自身をゲーテになぞらえるのである。ポンテンとの論争，文筆家／詩人，＜精神＞／＜自然＞という対立軸のなかで語られたことばではあるが，ここからは，そのような対立軸を越えた自負心，「これ以上ドイツ的なものはそもそも考えられない」作品『魔の山』を仕上げたことで，自分自身をもゲーテ同様「偉大なドイツ性の発露」と捉える自負心を見てとることができる。とするなら，本稿第二章で触れたマンの「代表者」意識，右からの攻撃にさらされることによってより明瞭に自覚される「代表者」意識は，ドイツの代表的な作家という程度のものではもはやありえないだろう。むしろマンはその意識においてドイツそのものを，『ブッデンブローク家の人々』に描かれる市民的伝統を保持するとともに『魔の山』にかれがたくしたドイツを[38]，ひとことでいうならマンにとってのヴァイマル・デモクラシーの精神そのものを「代表」しているということができるだろう。

ドイツそのものを「代表」しているというマンの「代表者」意識。それにたいして旧世代ブルジョワジーの「代表者」としてしかユンガーの目に映らないマンの姿。ここに埋めることの不可能な断裂が口を開ける。この断裂はたんなる世代間の対立を越えてマンとユンガー両者がそれぞれ「代表」する世界のあ

いだに横たわっている。わきあがるような<生>の感情に支えられたナショナリズム，それが予感する新たなドイツ——ユンガーが尖鋭的に体現する時代の潮流と，ヴァイマル・デモクラシーを擁護しようとするマンとのあいだに。トーマス・マンとフリードリヒ・ゲーオルク・ユンガー，両者は，ともに戦後の時代精神にふかく刻印づけられながらも，しかしけっして相容れることのない存在だったのである。

このふたりが「代表」する世界は，それぞれのしかたで外的な状況ともかかわり合う。本稿第一章で見たようにシュトレーゼマン／ブリアンによるロカルノ条約は，ドイツの孤立化を防ぎ，ドイツがヨーロッパの一員として，とくにフランスと協調してゆくというマンにとって非常に歓迎すべき流れをつくり出したのであり，かれの「代表者」意識を大いに高める要因となっていたといえる。しかしながらその流れは，ロカルノ条約に反対してドイツ国家人民党が内閣から離脱するという事件が端的に示しているように，まさにそれが目指す方向性ゆえに，ドイツ国内の「保守革命」的勢力を反対方向に向けてこれまで以上に尖鋭化させたのではないだろうか[39]。ロカルノ精神によって体制が安定すればするほど，動的なものを求める潮流は水面下でそのエネルギーを増殖させてゆくだろう。シュトレーゼマンの履行政策は，時代の深部に地殻変動をひき起こしていたのである。マンの「代表者」意識の高まりとまるで対をなすかのように，その対極にある闇部がふかく静かに広がっていたのであった。

1928年初頭のインタヴューをめぐるごたごたは，当初粗野な右翼との論争という色彩が濃いものであったが，そこにユンガーが加わることによって論争じたいが個人的中傷のレヴェルを越えてしまい，時代に根本的に刻印づけられたふたつの勢力のものへと発展する。マンはインタヴュー，『ベルリーナーナハトアウスガーベへの抗議』によって，相対的安定期の名のもとに時代の背後にひそみつつ[40]，その内部で尖鋭化していた非合理主義的ナショナリズムを強く刺激してしまったのである。ヴァイマル時代の「精神的豊かさは」，「著しい緊張をつくり出す異なる諸陣営の絶対性の主張によってうみ出された」とK・ゾントハイマーはいう[41]。マンとユンガーとを並べてみるとき，われわれ

はそこに，ヴァイマル時代全体を特徴づけていた断裂，時代が内包し，時代のダイナミズムそのものを形成していた断裂をみとめることができるだろう。同時にそこからは，幾重にも重なり合うこの断裂の一翼をになうことによって，「栄光の時代」の陰で「著しい」緊張関係を生き抜くマンの姿が，マンの発言だけからでは見えてこない，時代とののっぴきならない関係を切り結ぶマンの姿が浮かびあがってくるだろう。

最近マンの評伝がたてつづけに三冊刊行されたが，この事件については簡単に紹介しているものと，なにも触れていないものとがある。報告しているばあいも，右翼からの嫌がらせの一例としてこの事件が言及されているにすぎない[42]。多くの研究家が沈黙するなかで，マンとの関係において「革命的ナショナリズム」のあらわれとしてのF. G. ユンガーを，さらにはかれの『魔法を解かれた山』を取りあげているのがゾントハイマーである。ゾントハイマーは，西側との宥和政策に激しく反対するユンガーが，『魔の山』には親共和国的なところが見られないにもかかわらず，それを「宥和的」とみなし，『魔の山』にたいする攻撃として『魔法を解かれた山』をあらわしたという[43]。しかしそうだろうか。ユンガーは『魔の山』があまりに「宥和的」だから『魔法を解かれた山』をあらわしたのではないだろう。むしろかれにとって問題だったのは，魔の山の魔法に込められたもの，新たなナショナリズムに向けて発せられる旧世代ブルジョワジーの＜精神＞の力だったはずである。ゾントハイマーは，ユンガーにとって魔の山が，あるいはその魔法がなにを意味するのかということはまったく問題にしない。かれもまた，『魔法を解かれた山』をマンにたいする右翼陣営からの攻撃の一例としかみなしていないのである。マンとユンガーに触れている数少ない例としてゾントハイマーは評価できるし，本稿じたいも政治思想的な面では大きくかれにおうている。しかしかれには，一定勢力の，ゾントハイマー自身のことばを借りるなら「政治的現実」のあらわれとしてのユンガー[44]をとおしてマンを見るという視点，あるいはユンガーの目に映るマンという視点が欠落しているのである。このような作業をとおして，つまりマンとユンガーとを同一平面上に並べてみることによってはじめて，われ

われはヴァイマル時代が根底においてはらんでいた深刻な断裂を明らかにすることができるとともに，時代のなかに占めるマンの位置をすこしは精確に定位できる，いいかえるなら，「等身大」のトーマス・マン像にすこしは近づくことができるのではないだろうか。

ポンテン宛の手紙にもどろう。自分をゲーテに模すマン。そこから生じる強烈な自負心ならびに「代表者」意識。このような意識はマン自身を相当な「高み」へと必然的に持ちあげてしまうだろう。おのれの「存在」，「行為」がドイツ性のあらわれであるかぎり，マンにとっては自分の存在そのものがすでに「ナショナル」なのである[45]。こういった「高み」に立ってみれば，偏狭で排他的な「路地裏愛国主義」などは当然愚かしいもの，「野蛮」にしか映らない。『魔の山』完成後のマンはゲーテを導きの糸としてこのような地平にまで達していたのであり，ナショナリズムを一刀両断のもとに切って捨ててしまうようなインタヴューでのいささか不用意な発言の背後にも，自分自身が真の意味で「ナショナル」なものを「代表」しているという強い自負心があったのである。マン個人にかんしてはそれでいいだろう。しかしかれのそのような「存在」，それにもとづく態度は，当時はたしてどれほどのアクチュアリティーを持ちえたのだろうか。

ヴィリィ・ハース宛の手紙のなかで，マンはユンガーの論考を「みごとな，ちょっとした一撃」という[46]。『ベルリーナー　ナハトアウスガーベ』とはことなり，マンを誹謗中傷するのではなく，ユンガーが自分なりのトーマス・マン観を土台にマンにたいしてかなり真摯に反論をおこなっているということ，またかれが抱くナショナルな感情がストレートにマンに伝わったことに起因しているのだろう。ユンガーがおのれの感情を吐露すること，そのことじたいをマンはけっして否定しない。むしろ一定の共感を寄せてさえいる。しかしユンガーが提示するナショナリズム，またそれが目指すもの，それらをマンは「無責任」のひとことで切り捨ててしまい，ユンガーへの反論をハースにゆだねてしまう[47]。——そこでハースは『ディ　リテラーリッシェ　ヴェルト』1928年4月5日号に，マンのブルジョワ性を非難するユンガーが，まさにブルジョワ

の娯楽新聞である『デァ　タ－ク』にその非難を掲載するとは笑止千万であるといった調子の，ユンガーの論考にくらべるならまるで気の抜けたビールのような反論をのせることになる[48]。――このようなところにマンの側からの越えがたい世代間の溝がみとめられようが，しかし，マン自身ユンガーの発言を「ある種の政治的，あるいは似非政治的な若者の精神状態を記録する発言」と呼んでいるのである[49]。つまりかれ自身，ユンガーが提示してみせる世界観が一定の青年層に浸透していたことをみとめているのである。だとするならば，マンはユンガーにたいしてもみずから反論をおこなうべきではなかったのだろうか。われわれはむろんマンの発言が持ちえたアクチュアリティーを計量的に分析することはできない。しかし，インタヴュー事件から一年後の1929年にはプレナチズム的状況を呈してしまうような当時の情勢を，さらにはドイツがその後たどる運命を考えてみるとき，時代の一断面を体現しつつマンに論争をしかけているユンガーにこそ，マンはその「高み」から答えるべきではなかったのかという疑問がどうしてもぬぐい去れないのである。

後年マンは第一次大戦後の状況を振り返って，『ドクトル　ファウストゥス』の語り手ツァイトブロームにつぎのように語らせる。

> たしかにわたしはその当時，ラインの向こう側でならわたしたちのところよりももっと快適で，くつろいだ気分でおれただろう。さきにもいったように多くの新しいもの，混乱させるもの，不安にさせるものがわたしの世界観に襲いかかってきたのだが，しかしわたしは良心のためにそれらと対決せねばならなかったのである（……）。(VI. 469)

これはむろんマン自身の直接的な意見表明ではない。しかしこの箇所，とくに後半にかんしては，当時のマンの心境を映すものと考えてさしつかえなかろう。

「多くの新しいもの，混乱させるもの，不安にさせるもの」がおし寄せてきて，「わたしはそれらと対決せねばならなかった」――直接的には敗戦による

混乱から<転向>をはさんで1925年版の『ゲーテとトルストイ』あたりまでのことをいっているのだろう。その間マンは時代の新しい潮流とさまざまなかたちで「対決」をおこない，『魔の山』，『ゲーテとトルストイ』をうみ出したあとおのれの思想的・社会的・政治的立場をほぼ固め，さきに見たように一定の「高み」に到達したということができる。しかしかれはもう「対決」しなかったのだろうか。あるいはかれがおのれの立場を固めたのは，かれが「対決」に勝利した結果だったのだろうか。時代が安定するとともに，かれがおもに「対決」した「保守革命」的ナショナリズムは表面から姿を消したかに見える。しかしそれは水面下で，「生の哲学」，バッハオーフェン・ルネッサンスに見られる非合理主義的思想潮流と合流する回路を宿しながら尖鋭化し，時代の前面に躍り出る機会をうかがっていたのであった。そして時代の深層にマグマのようにわだかまるこの勢力が，F. G. ユンガーというひとりの若者に体現されるかたちで直接マンの面前にあらわれ出てきたのが，1928年のインタヴューをめぐる事件だったのである。だからわれわれは，ユンガーが加わることでまったく位相を変えてしまったこの事件を，たんなる嫌がらせや反発として片づけてしまうことはできないだろう。むしろわれわれは，ヴァイマル時代という時代を解き明かすために，またそのなかにマンをできるだけ精確に位置づけるために，マンがユンガーになにも答えなかったということをも含めて，この事件に今後さらに検討を加えてゆく必要があるだろう。

註

本稿で使用したトーマス・マンのテクストはつぎのとおりである。

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt/M. 1974.（本文中括弧内のローマ数字は巻数，アラビア数字はページ数を示す。）

Thomas Mann Briefe I 1889–1936. Hrsg. von Erika Mann. Frankfurt/M. 1961.（Br–1と略記）

Thomas Mann Briefwechsel mit Autoren. Hrsg. von Hans Wysling. Frankfurt/M. 1988（Br–Aと略記）

Dichter über ihre Dichtungen. Thomas Mann Teil I: 1889–1917 Hrsg. von Hans Wysling. Frankfurt/M. 1975.（DDと略記）

Die Briefe Thomas Manns. Regesten und Register Band 1 1889–1933. Hrsg. von Hans Bürgin u. Hans–Otto Mayer. Frankfurt/M. 1976.（R–1 と略記）

1）Volkmar Hansen, Gert Heine（Hrsg.）Frage und Antwort. Interviews mit Thomas Mann 1909–1955. Hamburg. 1983. S 121.

2）ebd.

3）ebd. S. 122.

4）ebd.

5）ebd.

6）ebd.

7）In : Jürgen Kolbe : Heller Zauber. Thomas Mann in München 1894–1933. Berlin. 1987. S. 389.

8）この当時，マンは右翼的な新聞にたいする不満ならびにその危険性をくりかえし私信のなかで表明している。たとえば，1926 年 11 月 14 日付フーゴ・フォン・ホーフマンスタール宛書簡（Br–A S. 219）および同年 12 月 3 日付ルートヴィヒ・フルダ宛書簡（R–1 S. 462）参照。

9）H/J ディークマン編，円子千代訳『クルティウス＝ジッド往復書簡』（法政大学出版局，原書 1980 年刊）106 頁参照。

10）K : Thomas Manns Kotau vor Paris. Der Mann, der für Vaterlandsverräter eintritt und sein Volk lästert. In : Berliner Nachtausgabe. Berlin. 6. Februar 1928.

11）ebd. Vgl. auch Georg Potempa : Thomas Mann. Beteiligung an politischen Aufrufen und anderen kollektiven Publikationen. Morsum/Sylt. 1988. S. 54 f.

12）K. ebd.

13）ebd.

14）Vgl. IX 180 ff. u. Br–1 S. 228.

15）Br–1 S. 228.

16）たとえばインタヴュー事件のあった 1928 年，マンは『非政治的人間の考察』短縮をめぐって，右翼的な新聞に私信を許可なく掲載されるといったごたごたに巻き込まれている。Vgl. Thomas Mann : Antwort an Arthur Hübscher. XIII. 602 ff. u. Die Flieger, Cossmann, ich. XIII. 609 ff.

17）K・ゾントハイマー，河島幸夫，脇　圭平訳『ワイマール共和国の政治思想』（ミネルヴァ書房，原書 1968 年刊）99 頁参照。

18）同上 122 頁。

19）Vgl. Armin Mohler : Die Konservative Revolution in Deutschland 1918–1932. Dritte, um einen Ergänzungsband erweiterte Auflage. Darmstadt. 1989.（Erste Auflage, 1950）S. 211.

20) Friedrich Georg Jünger: Der entzauberte Berg. In: Der Tag. Berlin. 7. März 1928.
21) ebd.
22) ebd.
23) ebd.
24) ebd.
25) ebd.
26) マン自身おのれの問題として，とくに『魔の山』受容との関連でこのことを強く意識していた。1928年12月22日付クルト・アウグスト・シーレンベルク宛書簡（DD S. 529）参照。
27) 拙論『<非政治的人間>の政治遍歴——1920年前後のトーマス・マンをめぐって——』（HUMANITAS 第17号，1992年）参照。
28) Jünger. a. a. O.
29) 文筆家／詩人論争および若者たちの『魔の山』受容については拙論『昼と夜と—1920年代後半のトーマス・マンをめぐって——』（HUMANITAS 第20号，1995年）参照。
30) Br–1 S. 226.
31) ebd. S. 278 f.
32) このことは，1922年のムッソリーニによるローマ進軍のあと，ただちにメラー・ファン・デン・ブルックをはじめとする「保守革命」の論客たちが，つぎつぎとファシズムに肯定的な見解を表明したことからもうかがい知ることができる。Vgl. Stefan Breuer: Anatomie der Konservativen Revolution. Darmstadt. 1993. S. 124 f.
33) ナショナリズムと非合理主義，またそれらとマンとの関係については拙論『昼と夜と』前掲書参照。
34) Friedrich Georg Jünger: Aufmarsch des Nationalismus. Berlin. 1928（Erste Auflage. Leipzig. 1926）S. 21 f.
35) ebd. S. 28 f.
36) Br–I S. 227 f.
37) たとえば1925年版の『ゲーテとトルストイ』IX. 138.
38) 『魔の山』完成後のマンは，主人公ハンス・カストルプが雪山で見る夢の理念を，さらには「死を越えて生にいたる道」というこの小説の理念的中心を，しばしばドイツの姿と結びつけている。Vgl. Thomas Mann: Zur Begrüßung Gerhart Hauptmanns in München. X. 219. また拙論『『魔の山』試論——主人公ハンス・カストルプの形姿をめぐって——』（京都大学大学院独文研究室『研究報告』第3号，1988年）参照。
39) 平井　正『ベルリン 1923–1927 虚栄と倦怠の時代』（せりか書房，1981年）302頁参照。

40）「保守革命」が時代の前面にあらわれ出てくるのは，おもにヴァイマル時代末期のことである。蔭山　宏『ワイマール文化とファシズム』(みすず書房，1986年) 143頁以下参照。

41）ゾントハイマー前掲書329頁。

42）Vgl. Donald A. Prater: Thomas Mann. Deutscher und Weltbürger. Eine Biographie. (Aus dem Englischen von Fred Wagner). München. 1995. S. 241. u. Ronald Hayman: Thomas Mann. A Biography. New York. 1995. S. 373 f. また，クラウス・ハルッププレヒトは1928年の『非政治的人間の考察』短縮をめぐるごたごたについては報告しているが，インタヴュー事件には一切言及していない。Klaus Harpprecht: Thomas Mann. Eine Biographie. 1995. S. 612 ff.

43）Kurt Sontheimer: Thomas Mann und die Deutschen. München. 1961. S. 75.

44）ebd. S. 73.

45）マン自身，1926年に「戦争イデオロギー」を内包するナショナリズムと区別して「真のナショナリズム」を，「ドイツ人という世界市民的でまんなかに位置する民族が持つ，留保に満ちた自己保持本能」(X. 659) と呼んでいる。これは『魔の山』のなかでハンス・カストルプが到達する立場であるとともに，マンが理想とするドイツの姿でもある。

46）Br–1 S. 278.

47）ebd.

48）Willy Haas: Bemerkungen zu einer Unterhaltungsbeilage. In: Die literarische Welt. Berlin. 5. April 1928.

49）Br–1. S. 278.